

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 5 月 30 日現在

機関番号：32612

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25350384

研究課題名(和文) 症例誌に基づいた医学史研究のイノベーション - 昭和戦前期精神病院を事例として

研究課題名(英文) An innovative research of history of psychiatry based on the analysis of case records of Ohji Brain Hospital

研究代表者

鈴木 晃仁 (SUZUKI, Akihito)

慶應義塾大学・経済学部・教授

研究者番号：80296730

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)：入退院について年齢、性別、診断、在院期間などの属性を通じた社会史的な構造をまとめて昭和戦前期の精神病院の利用のパターンを確定した。長期入院は全入院件数の5%程度で短期入院が主だったこと、短期入院は当時の先端的な治療法を重点的に行うものであったことを明らかにした。在院中の患者の行動については、臨床において医師の質問に対する答えや手紙・手記・伝記などの<作品>の形で自らについて述べたことが記録され、医師によって保存されていたことを明らかにした。これらは『精神医療の哲学』(東大出版会、近刊)とHistory of Madness (Routledge, forthcoming)に論文の形で発表した。

研究成果の概要(英文)：During the period of funding, I researched two aspects of psychiatric practice at Ohji Brain Hospital and published their results in two academic papers. I have clarified the patterns of the use of the psychiatric hospital and found that short-term stay with the purpose of cure, which had not been often realized, was the major pattern. I have also analyzed the patients' discourse both in their reply to doctors' questions and in their original writings and drawings.

研究分野：医学史

キーワード：医学史

1. 研究開始当初の背景

精神医療が隔離閉鎖型の精神病院から離脱して、地域精神医療に向かうという大きな転機を迎えている現在、過去と現在の精神病院の実態を検討する作業が強く求められているが、史料の利用可能性が極めて限定されていたため、精神科臨床の実態の研究はほとんど進んでいなかった。その状況で、医師と患者の間の治療や発言が記録された症例誌をまとまった形で入手して整理して、分析を行うことが求められていた。

研究の主たる資料となる症例誌やその他の史料が、保護・整理されていない状態で露出した状態で研究室に置かれていた状態であった。また、個々の患者の症例誌が露出して未整理の状態であった。

2. 研究の目的

症例誌というタイプの史料は、病院を中心に相当程度保存されているが、これまで日本の医学史の研究者によって用いられてこなかった。この研究は、症例誌を用いた初めてのまとまった研究成果を世に問い、その実証データに基づいて医学史研究の問題設定と方法論におけるイノベーションの方向性を示唆する。さらに、将来の研究のために他の病院における症例誌の保存状況を確認する。具体的には、患者という人口集団の性別、年齢、居住地、職業、在院期間などから精神病院という場のデモグラフィを研究する視点を打ち立て、それを背景にして医師 患者 社会の関係を分析し、特に治療法などを解釈する枠組みを作り上げる。

3. 研究の方法

個々の患者の症例誌から、計量される属性をデータベース化して、年齢、性別、在

院期間、費用負担者（私費か公費か）などについての分析が可能であるようにした。治療の方法についても、サンプルを取って計量的な分析が可能であるデータを作成した。一方で、質的な読解を通じて、記録された患者の発言や、患者が著者となった文書の分析を整理して、それらの分析を行った。

4. 研究成果

王子脳病院の患者症例誌を用いた研究を行った。具体的な研究は、以下の三点に分類される。1) 患者の症例誌を中心とする資料をアーカイブズ学の視点のもとで整理し、2) 患者の入退院の構造、入院期間中の医療の性格、患者の行動の分析、3) 精神病院の内部で起きたことがどのように同時代の文化・社会と関係していたかを明らかにすること。

1) 患者の症例誌の保存について、これまで露出していた資料を、「簿様」と呼ばれる保存用の紙で包み、それらを中性紙箱に入れて、患者の氏名の五十音順に分類するという作業を行った。この作業により、研究論文などで用いた史料を追認する経路を確保した。そのために、文書管理とアーカイブズ学の専門家の助けを借りた。

2) 患者の入退院の構造は、患者の在院期間と転帰が公費患者と私費患者で大きく違うことを明らかにした。公費患者の在院期間の中間値は2年から3年程度であり、第二次大戦末の急激な死亡の時期を除いても、約2/3が病院内で死亡していた。一方私費患者においては、在院期間の中間値は一月強であり、死亡したのは一割程度であった。また、数的には、公費が1割、私費が9割であり、公費患者に与えられる医療はごく少ないのに対し、私費患者はインシュリンショックや電気ショックなどのさまざまな当時の先端的な医療が与えられた。公

費患者に「治療」が与えられるときには、暴力行為の直後の電気ショックなど、懲罰的な性格を持つものであった。病院の全体的な性格としては、短期の在院期間に集中的な治療を受ける私費患者に重点があった。

3) 精神病院の内部において、診療の基本には患者の発言があった。個々の患者は毎日診療を受け、医師の質問に対して答え、その答えが記録された。それ以外にも患者の発言は記録されていた。精神病院の外部においても、同時期には、精神疾患と精神病院が文学の関心の焦点の一つとなっていた。島田清次郎や辻潤などの多くの文学者、中村古峡、島崎藤村、高村光太郎、上林暁など、多くの作家の家族が精神病にかかって精神病院などに収容され、それが文学において記述された。芥川龍之介の「河童」、夢野久作の『ドグラ・マグラ』など、精神病患者の言葉とされるものが、数多くの文学作品において取り上げられた。精神病院という場と精神疾患の発言は、精神医療の中で問題となって記録されただけでなく、文学などを通じて社会でも流通するようになった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計11件)

鈴木 晃仁、医学史の過去・現在・未来、科学史研究、査読なし、26号、2014、27-35、DOI無

鈴木 晃仁、A 精神医療と<文学>の形成 昭和戦前期東京の精神病院の症例誌から 科学哲学、査読なし、47巻2号、2014、33-51、DOI無

[学会発表](計21件)

鈴木 晃仁、Psychiatric Subjectivity

in Japan 1920-1940: Case Histories, Detective Stories, and Modernist Films, Bodies, Healing & Culture A Social History of Medicine in East Asia, 2015年11月5日、サンフランシスコ(アメリカ)

鈴木 晃仁、Empire, Eugenics, and "Ecological Psychiatry: Psychiatric Surveys in Japan from the 1930s to the 1980s", Psychiatry in Europe after World War II, 2015年10月30日から2015年10月31日、ハイデルベルグ大学、ハイデルベルグ(ドイツ)

鈴木 晃仁、Expressing Pathological Subjectivity in Japan in the Early 20c: Psychiatric Casebooks, Detective Stories, and Modernist Films, 14th ICHSEA Conference, 2015年7月6日から2015年7月10日 パリ(フランス)

鈴木 晃仁、The Psychiatric Case Record from the Patient's Point of View in Japan in the Early Twentieth Century, AAS Annual Conference, 2015年3月27日シカゴ(アメリカ)

鈴木 晃仁、Religion, Literature and Subjectivity: The Regime of Psychiatric Practice and the Making of Patient's Self in Early Showa Japan, Workshop on Mental Health in Japan, University of Pittsburgh(招待講演)、2015年3月6日、ピッツバーグ(アメリカ)

鈴木 晃仁、The brain, soul, and madness of the modern Japanese: Analysis of psychiatric case histories in Tokyo c1925-1945, Ettore Majorana Foundation and Centre for Scientific Culture, Ninth International Summer School on Mind, Brain and Education, 2014年7月31日、エリーチェ(イタリア)

鈴木 晃仁、戦前期東京の精神病院における<症例誌>のダイナミズム、日本科

学史学会・生物学史分科会、2014年7月5日、仙台市民会館（宮城県仙台市）

鈴木 晃仁、精神病床の限定と患者の受療行動 昭和戦前期の東京の精神病院のデータより、日本精神神経学会第110回大会、2014年6月27日、パシフィコ横浜（神奈川県横浜市）

鈴木 晃仁、Modernism and Mental Illness in Early Twentieth-Century Tokyo, Richardson Seminar, Institute for the History of Psychiatry, University of Cornell, (招待講演)、2014年5月22日、ニューヨーク(アメリカ)、

鈴木 晃仁、Science and Society, Workshop No. 1. Observational and Experimental Objects: Science Studies of Materials and Instruments in the Laboratory and the Field, 2014年5月4日、総合研究大学院大学（神奈川県葉山町）

鈴木 晃仁、日本精神医学の近代化モデルの再考、日本科学哲学シンポジウム 2013年11月23日 法政大学（東京都）

〔図書〕(計3件)

鈴木晃仁、北中淳子 編、東京大学出版会、精神医学の歴史と人類学、2016刊行確定、ページ数未確定

edited by Mark Jackson, Akihito Suzuki, Routledge, The Routledge History of Disease, 2016刊行確定、ページ数未確定

山下 麻衣、長瀬 修、梅原 秀元、松井 彰彦、鈴木 晃仁、長廣 利崇、大谷 誠、中野 智世、灘本 昌久、小林 丈広、藤原 哲也、法政大学出版会、歴史のなかの障害者 2014、354 (91 - 132)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年月日：

国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年月日：

国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

鈴木 晃仁 (SUZUKI Akihito)

慶應義塾大学・経済学部・教授

研究者番号：80296730

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：